



胚移植の前に胚の染色体数異常を検査

体外受精では、受精卵(胚)を子宮に戻す(胚移植)前に、妊娠成立や流産の原因となる胚の染色体異常を検査できる着床前診断があります。この「PGT-A(着床前胚染色体異数性検査)」と呼ばれる

検査は、二種類の方法があります。

● 2タイプのPGT-A

一つは従来からの一般的な方法で、体外受精や顕微授精によりできた胚の細胞の一部を採取(生検)し、その細胞の染色体や遺伝子の異常の有無を調べます。

もう一つは最近広がり始めた方法で、胚の入った培養液を検査します。受精して5日目の胚からは、染色体が培養液にしみ出しているため、培養液を検査することで染色体数異常が見かります。この方法は10年前よりさらに精度が上がリ、検査費用も半額になりました。昨年からフェリチクリンでも導入しています。日本やフランスでは2~5%の誤診があるという理由で一般の医院では採用されていませんが、ブラジルでは既に普及し始めています。

● PGT-Aのメリット

不妊治療を受けるのは35歳以上の女性が多く、年齢が上がるほどダウン症などに関わる染色体数異常が増えます。これまでも妊娠後に出生前診断が行われてき

ましたが、胚の段階で行うPGT-Aは次のようなメリットがあります。

- ・良質の胚のみを選ぶため、胚移植あたりの妊娠率は通常の20%から60%まで上昇する。
- ・妊娠あたりの流産率が低下し、流産による身体的・精神的負担を避けられる可能性が高まる。
- ・無駄な移植を減らせる可能性がある。
- ・妊娠までの時間を短縮できる可能性がある。
- ・検査した方が妊娠までの治療費を削減できる可能性がある。

PGT-Aは患者が医師と相談しながら、それぞれの状況に合わせて検査を受けるか判断されています。

※フェルチクリンの中野英二医師に解説いただきました。



《受精して5日目の胚》



フェルチクリン FERTICLIN

Av. Indianópolis, 1960 - Planalto Paulista- São Paulo - SP

Tel: (11) 5581-2045 / 5581-3566

www.ferticlin.com.br / contato@ferticlin.com.br